

2つの新聞記事の構造的読みとり

はじめに

2011年12月のゼミ宿題において、新聞記事の構造的読みとりを行った。具体的には、2つの追悼記事を比較した。天野道映の「天に伸びる声 酔いしれた 中村富十郎さんを悼む」(朝日新聞 2011年1月8日(土)付)。そして、中村哲郎の「王道一筋 女形極める 中村芝翫を悼む」(朝日新聞 2011年10月12日(水)付)である。

以下で、文章の構造的読みとりの注意点を示した。あわせて実際に2つの記事の構造分析の結果も記した。これにより、この宿題にどう解答すべきかの一例とする。ゼミ生の現状では、この程度の量の文章を読み込み、評価するにも困難がある。このことをよくよく胸に納め、以下の内容を咀嚼するようにしてほしい。

1. 構造とは何か

ここで構造とは何かを問うことは、今回の課題に即していえば、問題をよくつかむ、題意をつかむことである。それはともかく、文章の構造をつかむには、次の2つのことがポイントになる。

(1) 基本構成単位に分ける

どのような単位をもって基本構成単位とするか。最小単位と基本単位は重なる場合もある。重ならない場合もある。最小単位と基本構成単位を区分することが必要である。

この場合、基本構成単位は、課題文の長さや内容からすると、

① 段落では適切でない

② 段落をいくつかまとめた大項目が適切である

ただし、大項目もむしろ小項目としての段落と関係は持つ。いずれにせよ、追悼文の内容の柱となるべき単位部分があてはまることになる。

(2) 全体と部分の関係をつかむ

上のことからいえば、大項目と小項目の関係をつかむことといってもよい。

2. 読みとりの注意点

ここでの注意点とは、構造分析を意識して課題文をどう読みとるかということに関する注意点である。

(1) 基本構成単位をどこに置くか

上のとおり、最小単位と基本構成単位の違いに注意することが大事である。

(2) 基本構成単位はどのように展開され、また全体論旨とどうかかわるかを見きわめる

(3) 全体と部分の関係を把握する

全体と部分の関係を把握するとは、言い換えれば、全体論旨の展開という観点から、全体論旨と基本構成単位の関係や、柱の展開の仕方、大項目と小項目の関連などを見きわめることである。

(4) 文章は全体の流れや論旨に即して読みとる

個々の部分や表面的な記述に目がいたり、惑わされたりしてはならない。

(5) 論としてのストーリー展開がどこまであるか

これは文章評価の基本の一つである。論としてのストーリー展開というからには、羅列的な記述であってはならない。

(6) テーマと結論や基調が一直線で結びつくか

3. 2つの記事に関する見出し付けによる構造分析

別紙

4. 評価

文章としての評価は、天野道映追悼文の方が高くなる。

<理由>

① 構造が明確である

この意味は、全体と部分に緊密な関連があり、個々のエピソードは羅列的でないということである。

② 一貫した主張なりメッセージがある

「声のよさ」、「声の力」

③ 主張、メッセージに基づき、具体的な展開がなされている

④ 結論が腑に落ちる

天野道映 天に伸びる声 酔いしれた 中村富十郎さんを悼む

1. 導入

故人評価の着眼点、「朗々たるせりふ」

2. キャリア紹介から特質へ

(1) キャリア紹介

(2) 特質と美点

(3) 型を守る

(4) 名優の面影を彷彿とさせる

(5) 正統的な歌舞伎の継承者

3. 型から個性へ

(1) 独自色への旅立ち

(2) 事例 1

(3) 事例 2

(4) 天に伸びる声

「音声のすばらしさ」

「荒事などの高く張る声」

「真っすぐ天に伸びていくかと思われた」

(5) 歌舞伎における声の力

「声そのものの力」

「豊かな声に理性も感情も抱き締められる」

中村哲郎 王道一筋 女形極める 中村芝翫を悼む

1. 導入

2. 実績と紹介

- (1) 長い雌伏と遅咲き
- (2) 古典の基礎の蓄積
- (3) 名人の予言的中
- (4) 芝翫の美質
- (5) 舞踊技術の高みと冴え（事例1）
- (6) 合理的認識（事例2）
- (7) 現代的感覚の持ち主（事例3）
- (8) 持ち役の広がり（事例4）
- (9) 円熟の境地

3. 結語

2011. 1. 8 (土) 朝日

文化

天に伸びる声 酔いしれた

中村富士郎さんを悼む

評論家

天野 道映

人間国宝の歌舞伎俳優、五代目中村富士郎丈が亡くなった。最後の舞台となった昨年11月新橋演舞場では「逆櫓」の畠山重忠に扮した。この時はもう足が弱っていて、杖を突いて出たが、朗々たるせりふは少しの陰りも見せなかった。

人間国宝の歌舞伎俳優、五代目中村富士郎丈が亡くなった。最後の舞台となった昨年11月新橋演舞場では「逆櫓」の畠山重忠に扮した。この時はもう足が弱っていて、杖を突いて出たが、朗々たるせりふは少しの陰りも見せなかった。

芸の幅を広げ、また彼の人物の謙虚さが、器用貧乏でも異端でもない、最も正統的な歌舞伎俳優の道を歩かせた。歌舞伎は、初役の時は先輩に教わった通りに演じ、再演から自分の工夫を加えてもよい。ところが彼は常に先輩の教えを崩さなかった。

歌舞伎は、初役の時は先輩に教わった通りに演じ、再演から自分の工夫を加えてもよい。ところが彼は常に先輩の教えを崩さなかった。



主宰する「矢車会」では「勸進帳」の弁慶を79歳でつとめた。2009年5月、歌舞伎座。松竹提供

舞伎を演じる時には、新歌舞伎の系譜を継いで戦後関西歌舞伎の座頭になった三代目市川寿海の声や、彼の背後に聞いた。黙阿弥の世話物では、菊五郎劇団で師事した二代目尾上松緑の息遣いを感じた。さらに松緑の向こうに六代目尾上菊五郎の姿がよみがえるかに思われた。

また10年7月新橋演舞場の「文屋」。この時は持ち前の切れのよい振りとは別に、身体の深いところから、ふと踊りの精霊が滴るようだった。名人上手は数多くいるが、音声のすばらしさは他の追随を許さなかった。荒事などの高く張る声は真つすく天に伸びていくかと思われた。

歌舞伎のドラマは時に不思議な論理で人を納得させる。それはせりふの意味内容よりも、声そのものの力によるところが大きい。そのことを最も強く感じさせるのがこの人だった。豊かな声に理性も感情も抱き締められる時、観客は論理を超えて、ただ訳もなく歌舞伎に酔いしれた。

一方で先人とは違う独自の色を出すことも求められる。この点では5年ほど前から、ということとは75歳頃から意欲的だった。

例えば2005年9月の歌舞伎座「勸進帳」の富樫。弁慶の苦衷を察して関所の通行を許す時、顔を仰向けて涙をのむしぐさを、それまでのように正面向きではなく、斜め後ろ向きで見せ、そのまま奥の切戸口へ入っていった。その抑制の美しさ、覚悟の

2011. 10. 12 (水) 朝日 28頁 大版版

文化

✉ bunka@asahi.com

王道一筋女形極める

中村芝翫を悼む

中村 哲郎
演劇評論家

なかむら・てつろう 1942年生まれ。演劇研究者・評論家。著書に「西洋人の歌舞伎発見」「歌舞伎の近代」(AIC T演劇評論賞)、「花とフォルム」など。

中村芝翫が、83歳で亡くなった。歌舞伎女形の筆頭で、歌舞伎座の首席俳優でもあった。大震災に見舞われた今年、正月には中村富十郎、10月には芝翫という、正統的な歌舞伎演技の保持者として最高峰の名優2人を相次いで失った。謹んで冥福を祈りたい。

筆者は前名の福助時代から半世紀以上、芝翫の舞台を見てきたが、戦後の歌舞伎史において、彼が40歳前後で迎えた俳優としての

奇跡のような開花は、観客を瞠目させる事件であった。

それまでの昭和20〜30年代、彼は決して目立つ存在ではなかった。映画やテレビの助けも借りず、歌舞伎一筋に歩んで、古典的な基礎を黙々と蓄積した。だが当時、師であった六代目尾上菊五郎は、芸界の識者に「彼は今は地味だが、そのうちきつと光ってきまさう」と囁いていたという。

名人の予言は的中した。

芝翫の開花と、その後十数年間に及ぶ、とみに充実した舞台を実現できたのは、筆者の観劇生活においても浄福の一つだ。「鳴神」の絶間姫、「鏡山日錦絵」のお初、「妹背山婦女庭訓」の雛鳥と橘姫。密度と格調、気迫と芸品は、まさに無類だった。

芝翫を芝翫たらしめたものは、女性を演じて男声



襲名披露で「本朝廿四孝」の八重垣姫をとめる
1967年4月、東京・歌舞伎座。撮影・松竹

を基調とするセリフ回しの安定感と、イメージをくつきりと喚起する動きの鮮やかさにあった。

舞踊の「鏡獅子」「道成寺」「藤娘」「保名」などの技術の高みと冴えには、一瞬、客席にどよめきが生じ、満場感嘆の光景が何度か出現した。

芝翫の舞踊は、緻密な分析的確な応用によって構築されていた。かつて、愛弟子の一人である中村芝喜松は「師匠の踊りには明確な理論があるのです」と筆

者に語った。こう肘を張れば袖はそう動き、そう膝を折れば裾はこう流れる。その舞踊の造形美は、合理的な認識の所産だった。

彼には一方で、「伽羅先代萩」の飯炊きの場を長いと感じる、現代的な感覚もあった。新作歌舞伎「柳影沢螢火」のおさめ、「戦国の人々」の徳姫には陰影がにじんだ。

昭和後期の歌舞伎界で、芝翫は名だたる先輩たちに伍して、「先代萩」沖の井や「仮名手本忠臣蔵」お

石、「菅原伝授手習鑑」戸浪といった二番手女形のポジションを立派に確保、傑作も多かった。平成に至り、先輩たちが衰え、姿を消していく中で、芝翫は60歳を超えた頃からようやく「妹背山」定高や「忠臣蔵」戸無瀬、「撰州合邦辻」玉手御前といった、いわゆる立女形の役、また「道明寺」の覺寿のような老け役も務めるようになった。

そこには細部をリアルに拡大した演技や、舞踊では技術を超えた風味、情感への志向がうかがわれた。筆者が見た最後の舞台は、8月の新橋演舞場での舞踊「夏魂まつり」で、一家親族に囲まれた舞台姿は若々しく、馥郁たるムードに満たされていた。

幼少時に父や祖父を失い、壮年までの辛労は一通りではなかったはずだが、優れた指導者、慈母、良妻、子孫など、周囲に恵まれ、歌舞伎の王道を歩んだ彼の生涯は、文字通り幸福であった。唯一、我が家にも等しい歌舞伎座の新築・再開場を見ずに逝ったことが、残念でならない。